宮澤賢治研究叢書

賢治地理

小沢俊郎編

學藝書林

宮澤賢治宮澤叢書

2

賢治地理

學藝書林

宮澤賢治研究叢書❷賢治地理

編者――小沢俊郎
発行者――武田季男
発行所――株式会社學藝書林東京都中央区八丁堀二-三十五 電話〇三-五五二-五九〇六 振替東京一〇八二一
印刷・製本――東洋印刷株式会社
発行――一九七五年七月三十一日第一刷
© 1975 Toshirō OZAWA 1395-317504-1000

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

I

アルビヨンの夢と修羅の渚　小沢俊郎――8
母なる準平原　小沢俊郎――26
葛丸川幻想　金子民雄――44
成りてはやがて崩るてふ　小沢俊郎――58
作品「化物丁場」の執筆時について　菊池忠二――69
北海道修学旅行　小沢俊郎――76
「雁の童子」　金子民雄――90

II

宮澤賢治との出合い　早坂一郎――98

詩碑附近　菊池忠二――106
宮澤賢治の東京における足跡　奥田弘――127

Ⅲ

テバーンタール砂漠の位置　恩田逸夫――166
録した山々の名　小沢俊郎――183
北上川に添って　小沢俊郎――203
解説　小沢俊郎――223

装丁　宮園洋

賢治地理

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

アルビヨンの夢と修羅の渚

小沢　俊郎

五年前、研究会のメンバーが花巻紀行をした時、暁闇の花巻市についた一行が先ず向ったのがイギリス海岸だった。北上川の水で顔を洗い、肌涼しい空気に甦り、輪になって座って、自己紹介をし、朝食をとった。イギリス海岸は花巻第一歩を印する地として実に清々しく爽やかだった。北上川は悠々と流れていて、大河の中流の感じを湛えていた。岩を嚙む上流の激しさもなく、下流のしろじろとした砂利の河原もなく、川幅一杯に豊かな水を流していた。そのおおらかさに私はひどく感動した。その感動は北上岸の中でもこの地点を特に選び、名付け、愛した賢治の感覚への共鳴につながっていたと思う。ところで、その感動と逆に、どうしてここを「修羅の渚」と呼ばねばならなかったのか、という疑問が湧いたのも確かだった。水量や天候の加減にもよるであろうが、その時の私の感じには遠い「修羅の渚」だった。

全集第六巻に随筆「イギリス海岸」があり、第十一巻に「イギリス海岸の歌」がある。両者はともに一九

二三年八月作と年譜に記されている（補註1）。ところが、この同時作の二作品の内容が正反対であり、私の戸惑った感じと呼応している思いがするので、以下それについて述べてみようと思う。

随筆「イギリス海岸」は、「イーハトーボ農学校の春」「台川」「或る農学生の日誌」などとともに農学校の教師と生徒との生活を扱った随筆である。この中「イーハトーボ農学校の春」は歌曲随筆とでもいいたいような新形式のものであり、「或る農学生の日誌」は生徒になって書いた日記という構成上のフィクションに立っているので小説に近いといえる。形式的には、「イギリス海岸」は「台川」に大変似通っている。内容上からはこの二篇に加えて長詩「東岩手火山」が、教師賢治の生徒との校外生活の一面を描いたものとして、共通のムードを持っている。すなわち、生徒と一しょになって、生徒達を楽しくさせることに喜びを感じている点、知識欲旺盛で、地質学を中心とする知識の具体例を見出す喜びに溢れ、その知識を生徒に教えずにいられない心の躍りを示している点などで、いかにも年若い張切った良い先生だったことが感じられる。

さて、目下の考察対象の「イギリス海岸」は大略次のように文が進められている。

○イギリス海岸の紹介

地形の説明　海岸と呼ぶ理由（昔ここらは海であった）　その頃の想像と証拠の化石　もう一つの理由（波が海岸に似ている）

○七月末イギリス海岸へ生徒を連れて行ったこと

○八月六日再び行った折のこと

○次の日又行って救助員と話したこと、足跡を発見したこと
○更に翌日足跡採集に行ったこと
○八月九日実習五日目が雨でこの文を執筆していること

となっていて、構成・行文は極めて淡々としたものである。内容は前述したように明るいものであり、次のような特色を挙げることができよう。

(1) まず地質学的説明があり、色々と地質学的推理を働かせて、ここが第三紀時代には海であったことを述べる。第三紀というのは洪積世・沖積世の前の時代で、今から約六千万年前(岩波『科学の辞典』による)に始まるという。哺乳類が勢を得始めた時代で、未だ人間が誕生しない頃である。賢治はそういう説明をするのに、ふるさとの山や谷や入江について、太古の姿を想像で描き出してみせている。すべての知識が現在の自分たちと結びつけられて生きた知識となっているのは、「北海道修学旅行」の場合と一致する。そして最後にその推理の証拠として、イギリス海岸で見出した化石のことに触れる。自信を示しながらも、「ここを海岸と名をつけたってどうしていけないといはれませうか」とつつましげに筆をおさめている。

(2) 多くの草や木をその名で呼び、漠とした「草」「木」といういい方をしなかったことは、賢治の草木への愛情を示している。それと同じく、この岸に固有名詞を与えたこと(補註2)自体がこの地への愛着を示すものといえよう。しかも「イギリス海岸」という突飛で独創的な想像力には舌を巻く外はない。英国の古名 Albion がラテン語「白」の意味であることにも知れるように、波に洗われたイギリスの南海岸は白堊

の地肌をむき出しにしているという。そこは、浪漫詩人バイロンの詩などで有名なだけに、何か清新潑剌たる印象があり、同じ英国とは言っても、スコットランドやアイルランドの重い感じはない。賢治が、わがふるさとの北上岸の泥岩の白さに、遠くアルビヨンの海岸を夢みたことに、その命名当時の賢治の心の明るさ、張り、憧れなどを私は感ずる。

(3) そのイギリス海岸へ生徒を連れて行き、その名を教えて生徒の心に異郷の夢を与えた動機が、

町の小学校でも石の巻の近くの海岸に十五日も生徒を連れて行きましたし、隣りの女学校でも臨海学校をはじめてゐました。

けれども私たちの学校ではそれはできなかったのです。ですから、生れるから北上の河谷の上流の方にばかり居た私たちにとっては、どうしてもその白い泥岩層をイギリス海岸と呼びたかったのです。

という温かい気持にあったこと。

また、水難救助人が、

救助地域はずうっと下流の筏のところなのですが、私たちがこの気もちよいイギリス海岸に来るのを止めるわけにも行かず、時々別の用のあるふりをして来て見てゐて呉れたのです。

ということに気づいて、ひどく感動し恥かしく思う話。それに関して、

何気なく笑って、その人と談してはゐましたが、私はひとりで烈しく烈しく私の軽卒を責めました。実は私はその日までもし溺れる生徒ができたら、こっちはとても助けることもできないし、ただ飛び込んで行って一緒に溺れてやらう、死ぬことの向う側まで一緒について行ってやらうと思ってゐただけでした。

と考えていたこと。

これらを通して、いかにも賢治らしい温かな人間的な愛情がうかがわれる。

(4) 右の最後の一緒に溺れる覚悟の後に、

全く私たちにはそのイギリス海岸の夏の一刻がそんなにまで楽しかったのです。そして私は、それが悪いことだとは決して思ひませんでした。

とあるのは、どんなに教師生活が楽しかったかを示している。そして、楽しむことが悪いことではないと考えた賢治の心の動きの一面には、生徒に対してだけは全く開放的でいられたことが反映していると思われる。生徒に対しては、賢治は、ほかには妹トシ子にのみ示したであろうほど開放的だった。例えば、てれ屋

で、謙遜家の賢治が、次のような気負った言葉を掲示したりしたのである。

次の朝早く私は実習を掲示する黒板に斯う書いて置きました。

八月八日

農場実習　午前八時半より正午まで

除草、追肥　　第一、七組

蕪菁播種　　第三、四組

甘藍中耕　　第五、六組

養蚕実習　　第二組

（午後イギリス海岸に於て第三紀偶蹄類の足跡標本を採収すべきにより希望者は参加すべし。）

こんなに開放的な賢治は珍しいが、いかにも賢治の若さ、生徒と一体の気持がうかがわれるではないか。もう一つ、同様の例が右の引用につづく。それは、

この小さな「イギリス海岸」の原稿は八月六日あの足あとを見つける前の日の晩宿直室で半分書いたのです。（中略）その半分書いた分だけを実習がすんでから教室でみんなに読みました。それを読んでしま

ふかしまはないうち、私たちは一ぺんに飛び出してイギリス海岸へ出かけたのです。

という所。生徒の前で自分の文を読むほどに開放的な気分になっていた賢治と、それを正面から受け取った生徒の心の触れ合いは、さぞかし若々しかったろう。——そして、この明るさには後述するような事情も一因となっていると思われる。

それにしても教師生活を愉快だったとする次の「春と修羅第二集　序」は、いつわりなしの実感だったと考えてよいだろう。

（農学校につとめて居りました）四ヶ年は、わたくしにとって、じつに愉快な明るいものでありました。（中略）

わたくしは毎日わづか二時間乃至四時間のあかるい授業と、二時間位の軽い実習をもって、わたくしにとっては相当の量の俸給を保証されて居りまして、近距離の汽車にも自由に乗れ、ゴム靴や、荒い縞のシャツなども可成に自由に撰択し、すきな子供らにはごちそうもやれる、さういふ安固な待遇を得て居りました。

(5)　教師としての明るさと関係するが、知ることの楽しさ、教えることの楽しさに溢れている。例えば太古の獣の足跡を生徒に示されてぎょっとする所の描写、早速翌日生徒と一しょに採集に行く所など、知るこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com